

ゐのはな

編集兼発行者

千葉大学医学部

ゐのはな同窓会報編集部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉(0472)22-7171内線208

千葉大学医学部同窓会報 第61号 題字 鈴木五郎

相磯学長退官記念式挙行

——「キャンパスの歌」に託して——

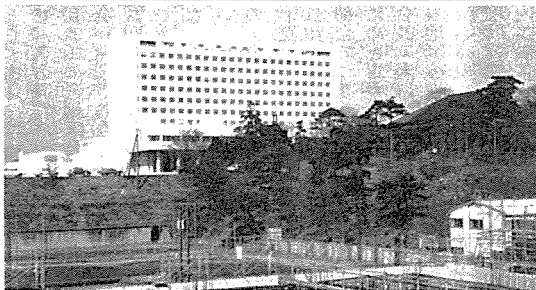
六年間の任期を満了され、昨年七月三十一日をもって千葉大学長を退官された相磯和嘉教授の退官記念式は、去る十一月六日(土)午後一時三十分より医学部記念講堂において盛大に挙行された。腐敗菌の系統的研究、細菌性食中毒、さらに、食品防腐剤の安全性の検討に及ぶ研究の担い手として、また大学紛争の渦中に学園の管理・運営を果された方としての退官にふさわしい充実した式典であった。

先生と親しい法政大学の中村哲総長による「天の思想と太陽の思想」と題する記念講演があった。

祝賀会にて第二歌集「キャンパスの歌」をお領け下さったが「長期計画など話しめど詰りたる手帳のごとく人ら黙せり」といった学長としての想いの歌の他、「種々のリンゴ割られて香に立てば夕べの部屋に酔ひてゆくなり」といった先生の味を示された作もあり

印象深いものがあつた。

完成近い新病院を背景に、生物活性研究所の新営工事すむ。左手は大学会館の松林。



医療情報部、小児外科 理学療法部開設さる

昨年4月および11月より医療情報部(部長、久保政次病院長併任、副部長、里村洋一講師)、小児外科(科長、高橋英世助教授)、

理学療法部(部長、井上駿一教授併任)が発足し、業務を開始した。医療情報部は医療面におけるコンピュータの応用を主とするも

ので、現在は医事会計業務のオンライン処理を主にこなしているが、将来は薬剤、給食、病棟管理などのパラメディカル領域、検査情報や病歴管理、ICU、CCUなどの自動管理などへの活用が予定されている。

小児外科は小児領域における先天異常などの外科を担当するもので、外来は地階、病室は一階に設置され、近く診療を開始する予定である。科長である高橋助教授は小児領域における消化管外科を専門とし、今後の活躍が期待される。理学療法部は主として物理療法、機能訓練、水治療法、言語訓練を行なうが、現在のところ整形外科および脳神経外科の一部を診療場所として使用し、院内各科よりの紹介患者のみを扱っているが、将来は活動の範囲を拡げる予定である。

北村 武教授 久保政次教授

最終講義

——合同退官記念式典の日程決まる——

北村 武教授(耳鼻咽喉科学)および久保政次教授(小児科学)は昭和五十二年四月一日をもって御退官されるが、このたび退官記念行事の日程が決定された。

最終講義は北村教授が「耳下腺腫瘍」について二月二十三日(木)、久保教授が「小児の喘息性気管支炎と慢性気管支炎の臨床」について二月二十五日(土)に、それぞれ午後一時三十分から病院屋階講堂において行なわれ、共にまことに盛会であった。

また合同退官記念式典は三月二十六日(土)午後一時三十分から、式典、記念講演会、祝賀会の順に、記念講堂において開催される。細目については追って通知される予定であるが、当日は多数の方々のご参加が望まれている。

岡林名誉教授 に藤原賞

六月十七日、岡林篤先生は第17回藤原賞を受賞された。王子製紙の故藤原銀次郎氏の創設した藤原科学財団による藤原賞は、我国で最も権威ある民間学術賞であるといわれている。受賞対象となった研究は「遷延感作の病理」であった。抗原刺激によつて免疫機構を長期にわたつて持続かつ徹底的にゆさぶることにより、「恒常性を逸脱した生体反応」として種々の免疫病(アレルギー性炎症、骨髄線維症候群、膠原病など)が発現してくることを、先生は実験的に見事に証明された。

お知らせと
お願い

① 永らく同窓会の事務を引受けていた多田美依さんが、昨年暮に転任してから、同窓会事務連絡がやや滞っていますので、今後当分の間、つぎのようにしたいと思ひます。ご協力下さい。

② 同窓会本部へのご連絡はなるべく月・水・金の昼間、同窓会事務係 村瀬さん(記念講堂内)へ(電話二八四)に願ひます。

③ 月・水・金以外の緊急のご連絡は、医学部庶務係 井深さん(内線二〇八・二〇九)にして下さい。

④ とくに各地のゐのはな会等への参加のご依頼は、できるだけ早目に④へご連絡下さい(個人宛にご連絡の場合も、一応本部までお知らせ下さるようお願いいたします)。

⑤ 本年度は、同窓会会計がやや逼迫しています。未納の方は早目にご納入下さい。

おわび

「安房るのはな同窓会」についての御報告は、記事錯綜のため、次号にまわさせていただきます。

昭六会だより



昭六会秋期旅行 於宮嶋 昭51.10.31.

年に一度、われわれクラスは一泊の旅に出る。生き残る五十余のほぼ半数が集って、夫妻同伴をあわせると三、四十名になる。この一行、まことに和気あいあいとしたあひなく、幼稚園児の遠足に等しい。関東、東北、北陸の漫遊をほぼ終えて、最近では西へ行く。しかも年一度の出合いではもの足らぬと、昨今は年二度にふえ、龍頭蛇尾ではなく龍尾の態である。昨年は九州、今年は十月末に広島宮島の旅をした。停年を過ぎててもなお元氣な一同の姿を記念写真によってごらん願いたい。

わがクラスの哲学者吉野兄の言によれば「西へ行くとは西行のまねびにほかならない。何の変哲もない昭六の呼び名にも深い含意がひそむ。医師として身を立てよう

とわれわれが初心を一にして同一性をふまえ、みな同じ出発点に立つとの平等観が生れた大学入学の年である。爾来半世紀に近い時が流れ、中間に戦争の体験をふまえて、前後に三十年余を等分に眺め複眼的思考可能な展望台にわれわれは立つ。戦争は平等観なき同一性にすべてをかりたてたが、戦後は反動として極端への逆転を招き、わが道を行くと個性の求める自由は利己的放縦に墮して差違性が世を蔽う。初心を一にする同一性を帯するわれわれも、それぞれ異なる径をたどり、そこに差違性を生じた。にもかかわらず孤立することなく、差違性を越えて同一性に我々をつなぎとめるものは何か。すべてが自己主張を捨て、自己が「無」になる謙虚さを持つことにある。この謙虚さこそ、個性を尊重する寛容につらなり、そこに差違性を肯定するとともに、同一性をも肯定してわれら平等なりを半世紀に亘って堅持した。無期愛こそわれら友情の根源であり、西行のまねびである」と。このような友情に結ばれた旅でこそ、一夜の宴には不参者の消息のみでなく、亡友の逸事が語り合われて、われらクラスは今日なお八十余名であるといえる。

再び吉野兄の言葉を借りると「われらの友情は不変であり、われらの辞書に旧交はない。友情とはここまで歴史の変遷に鍛えられて

こそ昇華すると知る。人生において至高のものは人との交情である。これこそわれらの実践をふまえた血の通う処世哲学である」と。

わが昭六会は良き友に恵まれ、

大阪、奈良、和歌山三地区 合同るのはな同窓会

去る十月十七日、猿沢の池のほとり、古都に相応しい奈良ホテルで、久方振りのお大阪、奈良、及び和歌山の三地区合同のはな同窓会が開催された。前回北村教授をお迎えして開催したのが四十六年であるから、五年振りと言う事になる。参加者は十五名と些か淋しい会であつたが、現在当三地区の全会員数が四十余名と頭打ちの状態にあり、又当日は絶好の行楽日和、又結婚シーズンとも重つて都合のつきかねた先生も多かったためと思われる。会は、石田俊孝会長(大11卒)の挨拶の後、近年当地区へ来られて初参加された、藤本輝夫(昭22東大卒、元岡林病理助教、現大阪市大教授)、宇佐美暢久(昭31卒、住友病院内科部長)、栗林 正(昭47卒、住友病院勤務)の三先生の紹介があり更に、司会石川より会の現況及会員消息等の報告があつて宴に入った。当日参加されなかったが、当地区の最長老は大正3年卒の西村逸石先生で、奈良県香芝町に今尚御健在であるのは悦ばしい限りである。



宴の終りに近く、最近の大学及び千葉市の現況が七十枚のスライドで供覧された。このスライド

同じ哲学的思考によつて結ばれているので、家族とももの旅行も永久に蛇尾に終ることはないと思じている。(松本 記)

前列左より 沢井豊之助(昭10) 巽 数男(昭6)、宮軒安太郎(大14)、石田俊孝(大11)、瀬田信一(大11)、小田寿雄(大14)、後列左より石川正士(昭32)、宇佐美暢久(昭31)、沢井夫人、清水公子(昭19東女医、堂野前内科)、藤本輝夫(昭22東大、岡林病理)、中島紀一(大14)、奥 真一(昭24)、三谷清美(昭29)、堤 丈夫(大14)、同窓会名簿中、左記の如く御訂正、御加筆下さい。

昭23 辻 潔 大阪府羽曳野市羽曳ケ丘西3-2-13 電話(07-29)56-174六五 尚、地区別会員名簿中、大阪地区にいます遠藤仁郎氏は、当地区には居りません。

大2 高峰二郎 物故
大4 浜田常次郎 物故
昭3 飯野鎮男 物故
昭20 塚本 弘 物故 (石川正士 記)

千葉医科大学卒業 三十周年記念クラス 会の記 (昭和21年卒)

去る10月16日、昭和21年卒業生による表記30周年の記念クラス会が、千葉市牧野屋において、千葉県在住者の胆入りで、全国各地から馳せ参じた41名が、恩師、鈴木(正)、谷川、三輪、鈴木(五)、小林、相磯の各先生をお招きしてひらかれた。

我がクラスは動乱の中に医学教育をうけ、敗戦後の混乱の中を空腹と戦いながら、初のインターン

を終験し、国家試験の洗礼を受けて医師免許証を手にした事など：藤原君の司会で、本間君の回顧談と先生方のお話を交えて思い出話に花を咲かせた。席上、母校の神経精神科教授の任に就かれた佐藤堂三君の祝賀をも兼ね、そして記念事業として、同級会誌を発行すること、大学構内に記念植樹を行うことを決議して再会を約して散会した。尚、翌日は、有志によるゴルフ大会が木更津市郊外にて行われた。(当日の寄せ書である、谷川先生の署名は欠けている。)(齊藤 弘 記)

山形大学医学部の近況

教授 白井敏雄



西蔵王高原を背景にした附属病院（後方）と臨床研究棟（右手前）

昭和四十八年九月に開設された本学部は、きびしい経済変動の荒波にもまれながら創設の仕事をはば計画通り実行出来た。すでに基礎臨床研究棟、講義実習棟、RIセンター、中央実験動物施設、附属病院等の建築、その中の設備の整備も完了した。その間、昭和五十年四月からは専門課程の教育が昭和五十一年十月からは附属病院における診療が始まり、医学部としての形態が整って来た今頃である。現在、本学は医学部に二十八講座、附属病院に十五診療科、四中央診療施設、看護部と薬剤部、それに学部・病院の事務一本化によって出来た事務部より構成されている。

四月に全員着任した。千葉大からは公衆衛生学講座の新井宏明教授、野尻雅美助教授（昭和三十九年卒）、精神神経科学講座の十束支朗教授（昭和三十一年卒）、矢崎光保助教授（昭和三十一年卒）、皮膚科学講座の麻生和雄教授（昭和二十四年卒）、川瀬健二助教授、解剖学第二講座の私の七名が加わり、それぞれの講座の整備をしながらの教育研究に、さらに臨床教室では診療に緊張した毎日を送っている。

現在、学生は専門課程二年まで在籍しており、本年秋からは附属病院と出形県立中央病院で臨床実習を受ける予定である。本学を含めて昭和四十八年度以降発足した国立医科大学では関連教育病院制度を導入し、それぞれの地域の基幹病院において卒前教育の中で学生に地域医療の実際を経験させることをカリキュラムの中に組み入れた。そこで、本学の関連教育病院である県立中央病院には教育研修部が置かれ、病院と医学部とが共同して実習計画等の検討を進めている。

本学は関係機関の強力な援助により順調な発足をみたが、第一回生の卒業も二年後にせまった今日、将来の発展の原動力となる若き秀れた人材をどのように育成するかと云う本学の命運をかけた課題に対処する時期に入つたようである。大学院の設置準備もその一つであろう。今までも、母校から多数の標本や図書、寄贈をいただくなど御援助を賜わったが、今後何にかと御支援を

お願いする次第です。山形には十数名のものはな会員が在住され、それぞれ活躍されている。昨年六月、相磯前学長が来学された折、ものはな会が開かれ始めて先輩会員との懇親を深めることが出来た。本年は附属病院を見ていただく予定になっており、今後さらに地元の先輩諸先生との連絡を密にしていきたいと考えている。（筆者は昭和三十一年卒）

君津中央病院だより

副院長 神田勝夫

病院の所在する木更津市とその周辺は、菅生遺跡や上代出土品で名高い金鈴塚古墳をもち、江戸時代は木更津船の呼称で幕府の海運を受け持ち、戦時は荒鷲渡洋爆撃の海軍木更津航空隊で勇名を馳せ、今は京葉工業地帯の南端を占める新日本製鉄君津製鉄所等の工業開発で注目を集めている。

病院は十萬都市となった木更津市の南端桜井地先にあつて、木更津駅から約四軒、バスで約十五分、国道一二七号線に沿う小高い丘の上にあり、正面に木更津市街が展開、その先には東京湾をのぞむ位置にある。

病院の創設は昭和十三年に農業団体連合会によってなされたが、昭和二十六年に国保団体連合会経営となり、昭和三十一年に市町村に移管されて現在に及んでいる。従つて病院の開設者は木更津市、君津市、富津市及び袖ヶ浦町の三市一町の組合であり、診療圏も同一地



消化器科、循環器科、小児科、外科、整形外科、脳神経外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、理学診療科及び歯科で、高等看護学院が附属されている。職員数は三二五名で、医師数

三九名、その殆どがものはな会員である。昭和四十六年一月三輪名譽教授（昭六）を院長に迎え、「自らの生命を託するにたる病院であること」をモットーとして、地域開発に伴ない急増する医療需要に対応し、房総南部唯一の公立総合病院として、地域医療の確保と充実につとめ、一般医療は言うまでもなく、特殊医療、高度医療、救急医療などにおいても基幹病院にふさわしい医療体制と施設整備をすすめているというのが現状であり、病院の新築、附属高等看護学院の開設及び校舎の建設、病床二〇〇床の増設増築、脳神経外科の開設が整備され、当面の施設整備事業として看護婦宿舎の増築と消防法の一部改正に伴う防災設備の設置計画がすすめられている。（筆者は昭和二十二年 児）

書評「大腸の癌・ポリプのX線診断と病理」丸山雅一著
著者は本学昭和四十一年卒業であるが大学紛争の時期に当り大学を離れ船橋中央病院その他を経て順天堂大学白壁彦夫教授の推薦で癌研究会附属病院内科に就職し、現在に至っている新進気鋭の臨床家で、国内はもとより国際的にも大腸のX線診断では名が通っている。当時癌研には熊倉賢二博士（昭和二十六年卒・現慶応大学教授）がおり直接X線診断学を学び得たことは著者にとつて、またとない幸いであつた。ときまさに大腸癌とくに早期癌が次第に注目されつつあるときで、いち早くこの領域の診断学をマスターし、癌研というよい環境とジャイロスコープの出現によって、全大腸の二重造影がきれいに撮影出来るようになったことも幸運であつた。本書は一九六頁の比較的薄い本であるが、沢山のきれいなX線写真・切標標本・顕微鏡写真が網羅されており、大腸のX線診断が、目瞭然、楽しめる本である。

これからこの領域を勉強しようとする人にもよい指導書となろう。なお巻頭に黒川利雄癌研名誉院長・白壁彦夫教授の序言もあり、本書を飾っている。

（医学書院刊）（奥井勝二記）

受賞
五ノ井哲朗氏（昭和二十三年卒・福島医大助教授）第二回「胃と腸」賞受賞
本賞は「胃と腸」（医学書院発行）創刊10周年を記念し、この度創設されたもので、昭和50年度中に同誌に掲載された「胃潰瘍の癥瘕区域 Nishio Break」とその臨床的意義について」に対して、最優秀論文として受賞された。
更科広美氏（昭和四十二年卒・筑波大外科学科講師）は坂口賞を受賞した。本賞は日本大腸肛門病学会において、毎年同雑誌に掲載された優秀論文に対して授けられたものであり、更科氏の受賞の論文は「クロリン病の臨床的・病理学的研究」（学位論文）である。
多田富雄教授・日本医師会医学研究助成費受賞

第一回 あのはな美術展の記

嶋田宗之(昭9卒)

同窓会の同好の士が集って美術展を開催した。十一月十四日から二十日までの一週間新宿のギャラリー・プロイセン。出品者は昭和三年卒から三十五年卒までの二十六名、作品実に六十点。書、水墨油絵、水彩、彫刻、陶芸と多彩であった。展覧に先立ち十三日オーブニングパーティを開いたところ四十数名(出品者以外)も集る大盛會。往時に帰って和氣あいあいの楽しい集りであった。

初めてのことであり同好の士を網羅することはできなかったが、旧白鯨社の会員が中心になり、人から人へのつても求めて「絵をかく医師」である会員に呼びかけた結果である。

さらに延二百数十名の人々が来場され主催者をよろこばせた。他大学卒業生も多数来訪されたが異口同音に「レベルが高いですね」とお愛想とは思えぬ真顔で称賛していた。

主催者は今回の成功に自信を得

書評 忘れ得ぬ思い出

三輪清三名誉教授 著

三輪先生にはこのたび大東亜戦争の際九死に一生を得た深刻な体験を記録した表記の著書を出版された。先づ鈴木五郎先生の名文で序文を飾り、巻頭の題字は元千葉大学教授浅見喜舟先生が書かれてる立派な装丁である。



因みに今回の出品者は東京、神奈川、埼玉、栃木、千葉の各県からである。ともすればさくられた毎日一それが健保制度下で医療にたずさる医師の偽らざる実感だが、にもかかわらず美をもとめ、真実を追及して絵筆をもつ医師の心境こそ意義深いものといえ

三輪先生は昭和19年8月29日真夜中セレベス海で敵の魚雷の攻撃を受け、赤道直下の大海に投げ出され、38時間もの間漂流した時の記録である。フカに襲れ、赤い布で助かり、最後には一斗樽につかり泳ぎ、睡魔におそわれたとき静岡

よう。本学には昭和初期から白鯨社という絵画の同好会があり、故伊東弥恵治教授(眼科)が中心になつて活潑な活動をしていた。また音楽同好会があつて文化活動は相当盛んに行なわれていた。戦後本学での文化活動が昔日の感なしといえない。今回の美術展を契機として再び文化活動の灯が学内にともされることが期待する声も少なく

なかつた。出品者は次の通り。
S3 森本一善、S5 伊藤行男、S6 池田脩三、三輪清三、S9 赤羽泰造、島田通男、中山恒明、辻本賢之助、S11 鈴木宜民、S12 細井四郎、S16 長尾透、S17 村上正中、大村光、内田成和、S22 今井力、神山英明、S24 石谷治彦、山川晋吾、井上通、S25 安岡陽三、S29 仲村長正、S31 山口慶三、空保文彦、山口庚児、S35 長谷川鎮雄(敬称略)

来年もほぼ九月、十一月の開催を予定している。
連絡先
東京都豊島区雑司が谷二一五一
村上正中

の母室様が夢に出て来て起してくれ、目をさましてやがて助け舟が来て救われたわけである。
そのまえがきに「戦争というものが悲惨な面の実態またそれによつて起つてくる人間の精神面などをやはり後に伝え残しておいた方が却つて将来の平和確立のために役立つことがありはしないかと云々」と書かれてあるが、戦後生れが国民の半分以上占めた現在

書評 糖尿病の食事

服部了司 著

著者は昭和27年卒、現在服部胃腸科院長として、東京の浅草で御活躍中であり、多忙な診療の合間を縫って書き上げられたのが本書である。本書は糖尿病患者の食事療法のための平易な解説書であり、糖尿病患者の食事の仕方が誰にでも分るように書かれている。本書の眼目は「お茶わん方式」による絵でおぼえる食事療法であり、種々な食事、おかず、間食、嗜好品が御飯何ぜんに相当するかを具体的に絵で示していることである。

著者は昭和27年卒、現在服部胃腸科院長として、東京の浅草で御活躍中であり、多忙な診療の合間を縫って書き上げられたのが本書である。本書は糖尿病患者の食事療法のための平易な解説書であり、糖尿病患者の食事の仕方が誰にでも分るように書かれている。本書の眼目は「お茶わん方式」による絵でおぼえる食事療法であり、種々な食事、おかず、間食、嗜好品が御飯何ぜんに相当するかを具体的に絵で示していることである。

書評 縦隔鏡検査法

武野良仁 著

武野良仁博士(昭和28年卒・日産厚生会玉川病院外科医長)にはこのたび表記の著書を医学書院より出版した。同氏は本学卒業後、第一外科において故河合直次名誉教授に師事し、その後玉川病院に就職し現在に至っている。この間数回にわたってヨーロッパ(西ベルリン・ヘッテスホルン病院)に留学し、胸部外科学を勉強している。これまで縦隔鏡検査は日本では殆んど行なわれていなかったのに、

西ベルリンでは肺癌のルーチン検査として確定されていたのに注目し、帰国後症例を重ね本書の刊行になった。
144頁からなる比較的薄い本であるが、縦隔の解剖・実技・本検査法の臨床的意義・今後の見通し等にもわかり易く言及してあり、写真・図表も多く、これから胸部外科学を勉強する人にとってもよい伴侶となるものと思う。定価六千円。
奥井勝二記

計報

黒田良智(昭17卒) 51年7月
久松春水(昭19卒) 51年11月
新井正男(昭20卒) 52年1月

編集後記

●風塵の少し立つ日の梅まつり
よき家のよき夕梅にかくあひし
大学の野も踏書の春となり
加賀谷凡秋

先頃「やばき会」編で凡秋先生の遺された句をまとめ第二句集「山桜」が刊行されたが、その中の春の項をめくると、先生が大学や大学の周辺で作られたこのような美しい句が並んでいる。新病院、看護学部、生物活性研究所、職員宿舎といろ／＼近代建築が建ち並ぶ玄奥キャンパスとなり、さらに学生寮の新築も話題になりつつある。大学の形態上の進展と共に真面目に考えなければならぬのは内面的充実であり、凡秋谷にみられるような自然のままの環境をいかにして守って行くかである。

一と時の便利さに溺れて永遠に失ったものが幾つもあることを真剣に考えなくてはならない。
●幸いに原稿に不足がないどころか今回も二、三は次号に廻さざるを得なかったことをおわび申し上げ、皆様の御協力に感謝します。
(村山)
次号(62号)は五月末に発行の予定です。